

## 中国河南省安陽小南海遺跡の石器群

はじめに 小南海遺跡は、殷墟で有名な河南省安陽市の西南30kmの石灰岩渓谷に所在する後期旧石器時代の遺跡である(図17)。1960年に発見、中国科学院(当時)考古研究所の安志敏氏らが試掘調査した。その成果の概要は、安1965年報告として公表された<sup>1)</sup>。なお、1978年に第2次調査がおこなわれたが、成果は未報告である。

安1965年報告 遺跡は洞口を東に向けた洞穴が崩落したもので、厚さ4.5mの堆積層は最上位の第1層から第5層に分けられる。石器7078点、石製装身具1点が出土したほか、豊富な動物化石が共伴した(表1)。

剥片剥離は、石錘による直接打撃でおこなわれる。石核調整を施さず、平坦打面石核と礫打面石核が存在し、前者から縦長剥片が、後者から横長剥片が剥離されるといふ。石英は両極打法によって剥片剥離される。平坦打面石核のうち、窄長な剥離痕をもつ細小な柱状石核(図18の2)とそれに対応する「窄長小石片(石刃状剥片)」(3~5)の存在から、熟練した剥片剥離技術と評価している。剥離された剥片は適当なものが選択され、未加工のまま、あるいは、二次加工を施して使用されたとした。ツールは、各種の「尖状器(尖頭石器)」(7、8、11~13、16)、「刮削器(スクレイパー)」(6、9、10)、「敲砸器(礫器)」に分類され、剥片素材の小型のものが中心で、両面加工のものはないという。

こうした小南海石器群について、華北の石器群との比較を行い、周口店第1・第15地点の石器群との間で、使用石材の構成、柱状石核や尖状器などの形状や製作技術等に高い共通性を見出し、その起源を周口店の石器文化に求めた。また、小南海のものと同様の石器群が旧石器時代後期に華北で広く分布すると指摘するとともに、それらが細石器と類似する特徴をもつことから、中国の中石器、新石器文化の先駆となったと推定した。

その後の研究 賈蘭坡らは、著名な華北旧石器の二大文化系統論を提唱する中で、小南海石器群を小型の船頭状刮削器・彫器あるいは細石器を特徴とする周口店第1地点・峙峪系の文化伝統に属するものとし、安氏の考えを肯定した<sup>2)</sup>。安氏は、賈の研究や河南省靈井の細石刃石器群と小南海石器群の類似性を指摘した周国興の報告<sup>3)</sup>、



図17 関連遺跡位置図

自身による内モンゴルハイラルの細石器の調査などをもとに、小南海の「柱状石核」、「扁体石核」(1)、「窄長小石片」を細石核、細石刃の祖形とし、その石器群が細石器文化の母体であるという認識を強調した<sup>4)</sup>。一方、張森水らは、この三者をいずれも両極打法と関連するものとし、同打法を多用する周口店第1地点石器群との近縁性をむしろ強調した<sup>5,6)</sup>。

最近では、両極打法は特定の系統関係を示さないとみなされるようになったことから、小南海石器群は、華北に普遍的な小型剥片石器インダストリーのひとつで、両極打法を特徴とする、とされることが多い<sup>7)</sup>。また、理化学的な年代測定も実施されている(表2)。

筆者の観察 中国社会科学院考古研究所の許可のもと、筆者は、過去数回、同所所蔵の小南海出土資料を実見していたが、2004年10月、より詳細な観察をおこなった。

それらによれば、剥片剥離技術には、両極打法、打面転位を繰り返すものや交互剥離で残核が礫器状を呈するものなどがある。後二者では、安氏の指摘のように石核調整はみられず、比較的多様な形状の剥片が生産される。両極打法では、縦長剥片とともに、幅1cm程度の小型の石刃(3~5)が量産されている。このうち、剥片はツールの素材となるが、石刃は二次加工されていない。

ツールは、上記の剥片剥離技術で生産された不定形な剥片を素材とする。その二次加工は、スクレイパーエッジを形成するものをはじめ、刃つばし加工、緩角度の面的剥離、鋸歯状剥離など多様である。器種には、削器(6~8、12~14)、小型で拇指状のものを含む搔器(9、

表1 小南海各層の石器組成(安1965より)

	チャート					石英				フリント		玉髄		石灰岩	合計	%
	原石	石核	剥片	尖状器	刮削器	石核	剥片	尖状器	刮削器	剥片	刮削器	剥片	刮削器	剥片		
1B	2	1	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0.14
1C	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0.04
2	14	6	433	1	9	0	0	1	0	1	2	2	0	0	469	6.62
3	10	28	357	2	13	0	0	13	0	1	1	0	0	0	425	6
4	32	346	4972	6	48	4	15	634	8	0	1	3	1	1	6080	85.89
5	6	0	75		6	0	0	2	0	1	0	0	0	1	91	1.28
小計	64	382	5844	9	77	4	15	650	8	13	4	5	1	1	17078	100
合計	6380					686				9		2		17078	100	

10) 鋸歯縁石器(15)、彫器(16)、片面調整尖頭器、揉錐器、ナイフ形石器?(11)などがある。安氏が「敲砸器」としたものは、大型の搔器と石核とみた。なお、15・16は、かつて「ナイフ形石器に近いもの」とした<sup>8)</sup>が、2004年の観察で、15は刃部とみた片側縁にそって狭長な側面があったことから鋸歯縁石器もしくは削器、また、16にも狭長な側面があり、そこに槌状剥離がみられたので彫器と、それぞれ判断した。

小南海石器群の重要性 不定形な剥片を生産する剥片剥離技術を中核とすること、各種の削器を中心とする器種組成などの特徴から、管見では、河北省西白馬営石器群が小南海石器群にもっとも類似する。ウラン系列年代も小南海に近い(表2)。また、ほぼ同時期とされる河北省益堵泉、山西省神泉寺、山東省沂源1号洞などの石器群も類似点をもつ。多くの研究者の指摘のように、小南海石器群は、後期旧石器時代後半、華北に広く分布した小型剥片石器群の一員ということができよう。

注目されるのは、両極打法による石刃の量産である。従来、この時期、華北には石刃技術は存在しないとされてきた。しかし、遼寧省西八間房、河北省四方洞上層、山西省賈魚溝などでも関連資料が出土しており、華北においても石刃技術が潜在的に存在した可能性は高い。小南海の両極打法もその一種とみなせよう。また、その石刃が二次加工されない点も重要である。彫器の存在もあいまって、植刃としての使用を想定させるからである。西白馬営や西八間房でも細石刃・細石核を連想させる小剥片・小石核がみられる。この時期、華北の石器群は細石刃技術に類する技術をもっていたと考えられよう。

以上、小南海石器群は、中国北部の後期旧石器時代後半の文化的様相、ことに細石刃文化の発生を研究する上で不可欠といえる。小南海石器群を細石刃文化の母形とした安氏の指摘をあらためて評価する必要がある。

おわりに 小南海の調査と研究をすすめた安志敏先生は2005年10月26日死去された。今回、先生の著作を再読し

表2 年代測定値(ZK:C14法、半減期5568年、未校正、BKY:ウラン系列法)

Lab. no	遺跡名	試料	測定値(年B.P.)	備考
ZK-0170	小南海(第1次調査)	動物骨化石	12710±220	各層試料混合
ZK-0654	小南海6層(第2次調査)	木炭	23420±500	
ZK-0655	小南海(第2次調査)	動物骨化石、木炭	10690±500	2-3層試料混合
BKY80053	小南海6層(第2次調査)	ウマ歯化石	21400±1300	
BKY80054	小南海6層(第2次調査)	シカ歯化石	18900±1500	
BKY	西白馬営	ウシ歯化石	18000±1000	
BKY	西白馬営	ウシ歯化石	15000±1000	

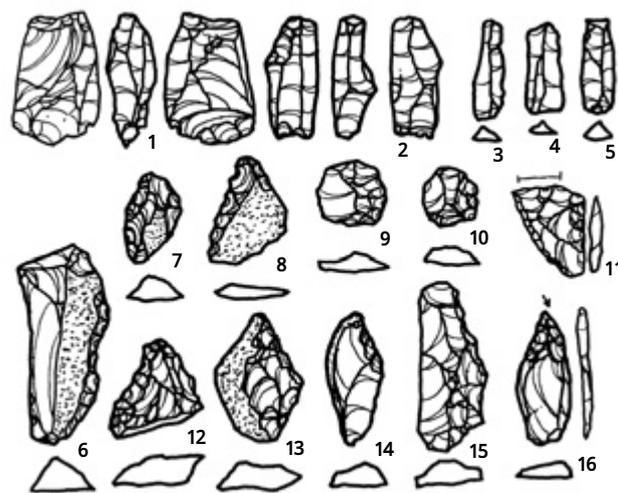


図18 小南海出土石器(S=1/2) 安1965をリトレス、11と16の側面図はスケッチ

たが、その先進性、水準の高さ、視野の広さを改めて実感し、鳥居龍三、裴文中、梁思永、夏鼐などの先学に師事した後、中国細石刃文化研究や新石器文化研究などに多くの業績を残された先生の足跡を思わずにはいられなかった。また、先生の笑顔と達者な日本語は忘れられない。ご冥福を祈ります (加藤真二)

注

- 1) 安志敏「河南安陽小南海旧石器時代洞穴堆積の試掘」『考古学報』1965-1
- 2) 賈蘭坡ほか「山西峙峪旧石器時代遺址発掘報告」『考古学報』1972-1
- 3) 周国興「河南許昌靈井の石器時代遺存」『考古』1974-2
- 4) 安志敏「海拉爾の中石器遺存」『考古学報』1978-3
- 5) 張森水『中国旧石器文化』天津科学技術出版社、1987年
- 6) 黄慰文「中国旧石器時代晚期文化」『中国遠古人類』科学出版社、1989年
- 7) 王幼平『中国遠古人類文化的源流』科学出版社、2005年
- 8) 加藤真二「中国北部の後期旧石器文化」『旧石器考古学』60、2000年